日本行動計量学会会報
第11号
1977年2月15日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
東京都文京区本郷7－3－1
東京大学医学部保健
学科疫学教室内

行動計量学これから

生沢雅夫

行動計量学は現在のところ、人間の行動に関係ある諸科学の境界領域の学だが、いずれ独自の学問体系が育つものと筆者は期待している。このような境界領域に関心が集まったのは、一方で、統計的方法や数理解析的な手法がコンピュータの普及によって実際に研究の道具として使えるようになったこと、他方で、各分野独自の研究問題に統計的・数理的方法を使ってみて一応の成果が上ったが、さらに一歩の前進を試みるべく互いの成果を持ち寄って相互に裨益しあおうというムードが高まったことによるものであろう。

この状況は、いささかオーバーな比喩を用いると、ヨーロッパをはじめとする全世界から新天地のアメリカ目指して希望に燃えた人々が流れ込んだのと、ちょっと似ている。ただしこれに対して、アメリカとは、文化的伝統の確立した諸国家からはじき出された疎外者の集団であるとする見方もある。しかし、現在のアメリカがいくつかの悩みをかかえながらも独自の分化を創出するのに成功したのは間違いない。

行動計量学の未来をアメリカの歴史になぞらえるのはまことにおこがましいが、多少の共通点はある。例えば、行動計量学に対してその開拓者精神を認めるかたのおられる反面、極めて批判的なかたもあるやに聞くからである。しかし、このようなことは学問の進歩にかならず付随しているもので、筆者はあまり深刻にならずに有効なツールを活用したいと思っている。

筆者は心理学の出身であるが、実験計画から多変量解析と統計的方法のお世話になってきた。その体験からすると、これらの方法を用いるメリットは案外なところにあるような気がする。それは、大量のデータをぶちこんでこねまわしているうちになんとなく結論めいたものが出てくるということだけではない。むしろこれらの解析法の背景になっている模型について習熟することによって、研究の進めかたについての見通しがつけ易くなる点である。心理学に限って言えば、その研究でとりあげようとする本来の法則は雑多な攪乱要因にかくれてなかなかとり出せない。まさに誤差の山をかきわけかきわけ法則らしきものをひっぱり出すのに四苦八苦しているのが実情である。誤差の山をかきわけながら研究方向に見通しをつけるには、模型についての知識が豊富なほうが有利である。これをシステム的思考といってもよく、類推の活用といってもよい。逆に研究方向への見通しが立てられない状況でのやみくもな計算はまさにゴミの山を作り出すのがおちである。

全く平凡なことだが、各分野の研究者がそれぞれどのような思考方向や思考のパターンで研究を進めているのか、互いにこつやノウハウを伝受し合うところから行動計量学の未来が開けてくるのではないだろうか。

（日本行動計量学会理事・大阪市立大学教授）

事務局、統計数理研究所に移転

いままで東大医学部保健学科疫学教室に置かれていた事務局が、この四月から正式に統計数理研究所に変ります。そのため、とりあえず日常的な事務を同所に移しましたので、本学会への連絡は左記の住所へお願いいたします。

（〒一〇六）東京都港区南麻布四の六の七　統計数理研究所　内

TEL（〇三）四四六－一五〇一

第五回総会、岡山大学で開催決まる
会期は九月一・二・三日の三日間

昭和五十二年度の日本行動計量学会総会（第五回）は、学会創立以来はじめて東京を離れ、九月一日から三日間、岡山大学で開催されることになりました。

実行委員長は脇本和昌氏（岡山大・教養）で、目下実行委員会を中心に総会プログラムの具体案を検討中です。

会員の皆さんには四月中旬に総会の実施要項が送られる予定ですが、ふるって研究発表の申込みをしてくださるようお願いいたします。

なお、総会について希望、提案がありましたら、実行委員長までお寄せください。どんな内容でも歓迎いたします。

シンポジウム案内

〃統計教育に関するシンポジウム〃（統研連主催）

日本学術会議統計学研究連絡委員会（統研連）主催の「統計教育に関するシンポジウム」が次のように開かれます。

統計学の側からの提案と他の分野を含めた利用者側からの要望を素材に統計教育の在り方を考えることを目的にしております。

本学会の会員の皆さんが多数参加くださるようお願いします。

（日時）三月十八日（金）
午前十時半～午後五時
（場所）日本学術会議大会議室
（司会）辻村江太郎、藤本熙
（あいさつ）丸山儀四郎
（講演者）竹内啓「確率モデルの考え方について」、宇喜多義昌「学校教育の立場からの統計教育」、鷲尾泰俊「応用分野の学生に対する統計教育」、水野坦「方法論としての統計教育」
（予定討論者）池田央、板垣浩、尾崎巌、高橋正

なお、この件についての問い合せは、シンポジウム事務局の藤本熙氏（統数研）へお願いします。

学会だより

循環器学会関係の国内および国際学会が次のように行われます。

○第四十一回日本循環器学会総会　四月四～六日　教育会館虎の門ホールほか

○第一回国際心臓研究学会　日本部会、十一月五～六日　全共連ビル

○第八回世界心臓学会　九月十七～二十三日　ホテル・ニューオータニ

なお、日本心臓財団（電〇三－二一六－四六〇二）が、第三回日本心臓財団研究助成事業の募集をしています。三月三十一日〆切り、一件二百万円、総額一千万円。

――＊＊＊＊＊＊＊――

○第四十五回日本統計学会総会　七月十一～十三日　福岡大学

○第五十回日本社会学会　十一月一～三日　国立教育会館

○第四十一回日本心理学会　九月七～九日　国立教育会館

○第十六回日本エム・イー学会　四月二十六～二十七日　都市センタービル・全共連ビル

○日本オペレーションズ・リサーチ学会春季研究発表会　三月十七～十九日　早稲田大学理工学部

また、OR学会の「第五回シンポジウム」が次のように開かれます。（テーマ）数理計画法、（日時）三月十六日　午前十時半～午後五時、（場所）早稲田大学理工学部

講演者は、岡本吉晴・玉井哲雄「線形計画法の最近の話題」、小野勝章・山本浩「非線形計画法」、茨木俊秀「整数計画はなぜむずかしいか」、志水清孝「多目的システムにおける意思決定と最適化」。なお、当日参加費が必要です。

◆欧文誌原稿募集◆

欧文誌Behaviormetrika, No.5の原稿〆切りは、本年十二月末です。投稿の要領については既刊誌のウラ表紙のウラを参照してください。期間が十分ありますので、ふるって応募してください。

◎和文誌原稿募集◎

和文誌「行動計量学」第五巻一号（本年九月発行予定）の原稿を募集します。応募の要領は既刊誌の表紙のウラを参照。なお、同号の特集は〃質を測る〃です。

会議議事録要旨

◇理事会（十一月十二日）
於　統計数理研究所
出席者　理事　九名

1. 第五回総会開催場所は岡山大学とする。会期としては昭和五十二年九月上旬を予定する。
　原則として予算は独立とし、総会運営については開催校に一任する。
2. 事務局員として水野欽司氏（統数研）を加える。なお事務局は五十二年四月に東大疫学教室から統数研へ正式に移転するが、事務局の柳井晴夫氏（東大医）が海外出張するため日常事務については一月より統数研に移し、水野氏が代行する。
　以上に関連して、同氏より学会運営と事務局の在り方について試案が提示されたが、次回理事会で検討し、事務局の役割を定める。
3. 運営委員会より推薦のあった大里栄子氏（福岡女子短大）を運営委員に加える。
4. 各種委員会報告（和文誌、欧文誌、運営委員会）

◇運営委員会（十一月十五日）
於　統計数理研究所
出席者　運営委員　九名

1. 第十六回月例シンポジウムは五十二年四～五月頃にSMCと共催で行う。それ以後については担当委員が検討して年間スケジュール案を作成する。また年間の予算案を次回運営委員会にはかる。
2. 第七回以後の講習会について担当の委員で検討し、次回にテーマ案を提出する。
3. 会報は、五十二年一月末に11号を発行する。また12号を四月頃に発行する予定。
4. 小グループ研究会、地方部会に対する補助金の件について、担当の委員がグループの活動状況を調べた上で補助金配分方式の案を作成する。
5. 運営委員会議事録の記録係は各委員が持ち回りで担当することとし、委員会後一週間以内に委員長の手を経て事務局へ送付する。

◇運営委員会（二月七日）
於　統計数理研究所
出席者　運営委員　九名

1. 脇本委員より九月に岡山大学で開催する第五回総会の準備経過の説明。
2. 第十六回以降の月例シンポジウムとして、SMCと共催するもののほかに、「相関」と「広告戦略」の二つのテーマを当面予定し、担当委員がオーガナイザーの交渉に当たる。
3. 月例シンポジウムの経費として、講演者謝金を含み年間20万円を予算として計上する。また遠方からの講演者旅費を別途考慮する。
4. 第七回講習会は、テーマを「多変量解析」として六月に実施する。ただし、テキストは第五回講習会のテキストを使用する。
　秋に予定する第八回講習会については担当委員が八月までに具体案を作成する。
5. 小グループ研究会への補助金は、担当委員が活動状況を調べ、その検討結果にもとづいて運営委員会が認めたグループについて年額一万円を補助するものとする。
　以後、活動状況が判明したグループごとに検討の上、実行に移す。

研究会だより

九州地区で研究会が発足

このほど、九州地区で大里栄子氏（福岡女子短大）を発起人とする研究会が発足することになった。
　隔月一回の研究会を予定し、目的は、数学・医学・心理学などにおける行動計量の問題や各種実験デザインの検討となっており、今後の活躍が期待されている。

事務局から

○本学会に入会を希望する方がありましたら、事務局（1ページ左下参照）までハガキでお知らせください。事務局より入会申込用紙、振替用紙などをお送りします。
○既刊の学会誌（Behaviormetrika, 行動計量学）の残部が若干ありますので、ご希望の会員に有料でおわけします。ご連絡ください。代金など詳細をお知らせします。
○住所、所属など異動のあった場合は速やかにご連絡ください。
○本学会の会員数は次のとおり。

（正会員）　七〇九人
（準会員）　一六八人
（賛助会員）　三三法人
（二月十五日現在）

会員の声・1

〃学際的〃ということ

日高広見

○○学会、××学会……と学会ばやりの中で、会員として常に疑問に思うことは、本学会はどのような特色を持っているのか、持とうとしているのか、ということである。これに対して、設立目的の一つである学際的な学会を目指すということは、ほとんどの会員が頷く答えの一つであろう。確かに学問体系が細分化した現在では、このような学際的な学会は必要なもので、本学会の目的の大きな部分を担っているといえよう。

では現在の学会は学際的であろうか。確かに、心理学、医学、社会学、数学、工学等多くの分野の人々が会員となっているが、はたして学会内で学際的に交流がなされているのであろうか。例年の総会を見る限り、答は悲観的である。いくつもの学会をただ寄せ集めただけという印象を受けるのは、私だけであろうか。

この原因の一つは、各分野内での研究のための研究とでも呼ぶべきものが主流を占めているからではなかろうか。方法論の追求もそれが自己目的化してしまっては何にもならない。社会へインパクトを与える研究こそ必要であろう。より大きなテーマで、各分野の協力なしにはできず、社会的にも価値のある研究を学会として押し進めることはできないのであろうか。さもないと学際的というかけ声も何か虚ろな響きしか与えないように思える。（日本行動計量学会員、日本能率協会総合研究所）

会員の声・2

「ふさわしい」論文

M生

応募論文の審査に関して「行動計量学にふさわしい」とはなにか、という先号声欄におけるMH生の問いかけは、重要な問題を提起しているように思います。

「〃ふさわしい〃範囲を性急に狭ばめ」るべきではない、という主張には、もとより私も賛成です。学会創立後、日が浅い現在では、軽々に「ふさわしいもの」を固めるべきではなく、第一にそれだけを抽象的に論じても、あまり意味のないことでしょう。

ただ私は、それでも、「ふさわしい」ものはあってよいと考えています。たとえば、他の学会誌に掲載可となる論文でも本学会の機関誌では不採用となることがあってかまわない、と思うのです。この逆もあるでしょう。ただし、これは原則論であって、「ふさわしい」ものを巡るコンセンサスが熟さぬ間はさまざまな見解が会員間で交わされてよいでしょう。その意味で、論文のレフリーが自分の見解を一方的に押売りしたら困りますが、内容検討の際に「ふさわしい」の判断を一項加えたとしても許されると思います。問題は、レフリーは自己の見解を明確に応募者に伝えるべきだし、応募者は反論があれば意を尽して応えるべきでしょう。その点MH生が挙げたケースは多少意志疎通を欠いていたのではないでしょうか。

レフリーの任にあたる方々は、当然この辺を心得ていると思いますが、なおいっそうの努力をお願いすると同時に、応募する方も本学会に提出するのが一番ふさわしいと自分が信ずる論文を投稿していただきたいと望んでおります。

（日本行動計量学会会員）

◇会員の声をどしどしお寄せください。　運営委広報係

編集後記

日本行動計量学会が発足してはや4年になる。その間、会員数は年毎に急速に伸び、また他の学会には見られない程の多彩な学会活動は驚嘆すべきものがあった。このような事実は人びとがいかに本学会を求めていたかを如実に物語っている。

しかし、大きなエネルギーをもって活動する学会も、この学会特有の困難を内に秘めているやも知れない。すなわち、多種多様の専門分野の方々の集った学会であることによる生得的困難である。誰しも学会を通じて、他の専門領域に接する喜こびと意義を存分に認める反面、あるときは自分の専門と関係のない他の諸学会に次々と身を置く錯覚に陥る怖れなしとしない。

それはともかく、3年のセブミ期間を経て、一切の杞憂もなく、いよいよ本格的発展期に入ろうとする学会の将来に大いに期待したい。

なおこの会報が今後とも皆様のご協力を得て学会発展にいさゝかでもお役に立てばと思う次第である。（今井記）